

本 当 の 書

佐々木 折 柴

無意識に、字がうまいという言葉が常に使われるが、このことは書の本質からみてどうか。陳腐なことだ。

われわれは、巧拙にとられすぎまいか。今まで書法の伝授がここから出発し、それに終始してしまっているのでは仕方がないといえはいるのだが、このまま踏襲していい筋合いのものでは決してない。

例えば、筆をやたらに弄し、くねくねさせて得意気な筆致を示す。技巧だけに走ると、えてして粗悪で厭味たらしい傾向に落入る。こうなると、習気が目立ち鼻持ちならなくなる。

一步目を先に向けよう。自分を投げうつての体当りの所作はどうだろう。下手でもいい、精一杯の力を作品にぶちまけ、大いにあがき苦しむことだ。その苦しみから人間味のあふれた尊いものが生れてきやしないか。

これが単なるうまさだけでない本当の書だと思ひ。

第5回

書部門入賞者

	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	吳昌碩尺牘	雅楽川 一 睡	
いわき市議会議長賞	六言二句	石川 大 溪	
いわき市教育委員会 教育長賞	受 知	田 辺 碩 声	
(佳 作)			
諸橋金物俵賞	七言律詩	松崎 秋 香	
いわき商工会議所 会 頭 賞	鳥 啼 歌	草野 露 愁	
トカイ文具賞	感 賦	菅野 空 谷	
ヤマニ書房賞	布衣疎食	園部 秋 月	
ライオンズクラブ賞	吳昌碩詩	芳賀 二 葉	
加地和組賞	李賀の詩	清水 桂 心	
坂本紙店賞	雁 帰	大河原 一 醉	
福島県報徳社賞	彩	吉田 海 牛	
"	吳昌碩詩	小林 静 流	
"	聞声悟道	門馬 春 錦	
"	豊 穰	村上 三 峨	
教育委員会賞	七言絶句	木村 浩 教	
"	経下邳圮橋懷	生天目 豊 州	
"	長安古意一節	関根 溪 石	
"	杜 甫 詩	白川 一 風	

静かさ

後藤桂仙

「静かさ」昨今次第に縁遠くなっている言葉の一つ。

世の中本当に騒しくなってしまった。右も左も騒音、騒音。

書の展覧会も同じく騒しい。強さを強調する余り力み過ぎてここも亦騒音(?)の発生地。一回りする頃には、頭が変になってくる。

この市民展だけは、中央展の延長ではありたくない。騒音から逃避の出来る静かな場でありたい。

力を内に秘めた静かな作品が欲しい。白と黒との調和のとれた品の良い作品が欲しい。奇を求める余り字をいじめ過ぎぬ様にしたい。これでは、字が可哀相だと同情したくなる作も目に付く。ここからも字の悲鳴とも思える騒音が聞かれる。

一見よさそうに見えても、よく見ると甚だ不安定な作もある。基本が出来てないせいだろうか。基礎をおろそかにして家を建てている感じで、甚だ危っかしい。

構成がどうの、にじみがどうのと考える前に、先ず一字一字を丁寧に正しく書くことが、先決ではないだろうか。

初心に帰って、基本をしっかりと学び直す必要があるのではないだろうか。

と自分自身に言い聞かせた。

第6回

書部門入賞者

	題名	氏名	住所
いわき市長賞	甲骨文	田辺碩声	
いわき市議会議長賞	五言二句	石川大溪	
いわき市教育委員会 教育長賞	華魁	村上三娥	
(佳作)			
大黒屋ブックス賞	漢詩	芳賀三葉	
商工会議所会頭賞	緑綺之琴	木村浩教	
文化団体連絡 協議会会長賞	杜甫詩	清水桂心	
ライオンズクラブ賞	五言二句	園部秋月	
加地和組賞	習元蛩火	寺島江邨	
トーカイ文具賞	五言二句	松本樹泉	
福島県報徳社賞	杜甫詩	服部聖峰	
"	贊	裏吉田海牛	
"	杜甫詩	白川一風	
"	六言二句	荒井東苑	
"	業舟陶嘉月	門馬春錦	
"	吳昌碩詩	斉藤小波	
教育委員会賞	萬丈	譚生田目豊州	
いわき市書道協会賞	一切經	蛭田秋月	
"	詩滿	裏菅野空谷	
"	朝の歌	助川空翠	
ヤマニ書房賞	漢詩	鈴木華泉	
マルトモ書店賞	放懷聊自遣	小宮唐遷	

審査にあたって

村上皓南

作品傾向は昨年度に比して、深い落ち着きを増し品位あって格調の高さがあらわれてきた。やはり、書之美は枝柄はもとより、深く美しいものでありたい。

年々相変らずの作品もあれば、じっくりと腰をおちつけて沈潜したもの、明るく麗澤なものへのあこがれが見受けられてきたことは嬉しいかぎりである。

入賞者の顔ぶれが何時も同じで、ここに新人の台頭奮起を促したい。そういう意味をこめて審査は、細部に亘り充分論議をつくしたが注目に値する新人の作品に出会わなかったことに一抹の淋しさを感じた。

この市美展を素晴らしいものに盛りあげるのも新人の熱気の如何であり、市美展の意義と展望が開けてくるものと思われる。

出品作の中には、騒がしい枝柄だけのものに終り、筆が空転してこのままでは先がどうなるだろうと危ぶまれる面も窺われた。ここで静かに古典をふりかえり、古典に立脚したすぐれた作品を出品されることを切に望んでやまない次第である。

書はあたりまえでいい、それですぐれたものであって欲しいのです。

第7回 書部門入賞者

	題名	氏名	住所
いわき市長賞	五風十雨	菅野空谷	
いわき市議会議長賞	眼明身健	園部・秋月	
いわき市教育委員会 教育長賞	李太白詩	雅楽川一睡	
(佳作)			
ダイコクヤブックス賞	遙皇	田辺碩聲	
商工会議所会頭賞	白楽天詩	清水桂心	
文化団体連絡 協議会会長賞	蘇東坡詩	芳賀二葉	
ライオンズクラブ賞	七言二句	荒井栗苑	
加地和組賞	間是齋	渡辺大雅	
トーカー文具賞	涼風帶雨來	門馬春錦	
株式会社すまい賞	蘇東坡の詩	神林東伸	
諸橋金物株式会社賞	花叡經	蛭田秋月	
福島県報徳社賞	漢詩	斉藤小波	
"	七律詩	木村浩教	
"	開爐稗冰	菅野桂洞	
"	朝の歌	助川空翠	
"	杜甫詩	白川一風	
"	新古今和歌集	後藤八重子	
ヤマニ書房賞	五言絶句	小宮唐遷	
いわき市書道協会賞	落葉飄	大河原一醉	
"	漢詩	鈴木華泉	
"	喬林時曝衣	矢内齊	

審査にあたって

田久奇峰

本展に書の部門が入ってから4年目であるが、今回の作品程力量が伯仲し、審査員をなやました時はなかったと思う。うれしい限りである。それは

1. 作品構成に無理がなく、それぞれ工夫されていたこと。
2. 表現技法は、制作意図が明確で、骨格に確かさがみられ、リズムの中に程よいアクセントを出し、格調の高いものが多かったこと。
3. 学書態度が真面目で、それなりに精一杯の努力がにじみ出ていたこと。
4. 額装の吟味、台紙の色彩等も手伝って、内容を一層効果的にしていたこと。等である。

入賞作品については、力が内に蔵し独自の思想とでもいうか、個性の発揮とでもいうか、今までの殻の脱皮を試みているかのような意欲的な取組みがみられ頼母しく感じられた。

しかしながら、書の道は深くそして遠い。私たちの仕事はこれからである。地味でもいい、常に古典を素材としてよい作品を数多くみつめ自ら厳しさを求めていく謙虚さと研修意欲は最も上達をはやめる道ではなかろうか。

新人の顔ぶれも逐次増加の傾向をみせていることは大変うれしいことだが、この展覧会を通して、技術面では、墨色、墨量の加減、線質の錬れ、ニジミとカスレのバランス山場のおさえ方、全体的ムードの表現技法、落かん、位置の工夫等々や精神的なゆとりのある作品づくりに更に意欲を燃やしてほしいと思う。

そして、心に響く作品、会場で足を止めさせるような作品をつくりたいものである。

第8回

書部門入賞者

	題名	氏名	住所
いわき市長賞	良寛詩	清水桂心	
いわき市議会議長賞	七言絶句	矢内齊	
いわき市教育委員会 教育長賞	蘇軾詩	芳賀二葉	
	(佳作)		
ダイコクヤブックス賞	曹子建詩	雅楽川一睡	
トーカイ文具賞	清廉節儉	菅野空谷	
いわき市書道協会賞	十一字句	園部秋月	
"	李白詩	松崎秋香	
"	唐詩	吉田汀秀	
福島県報徳社賞	吳昌碩詩	関根紅葉	
"	草花鉢	助川空翠	
"	轉處自随流	門馬春錦	
いわき商工会議所 会頭賞	畫龍點晴	菅野桂洞	
いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	杜甫詩	白川一風	
ライオンズクラブ賞	漢詩	斉藤小波	
加地和組賞	王漁洋詩	関根溪石	
株式会社すまい賞	李夫人	荒井東苑	
勝山堂賞	深窓秘抄	後藤八重子	
遠藤一心堂賞	七言二句	寺島江邨	
"	情慮肅	福田鉅野	
"	聽幽禽	江尻苔逢	
"	吳昌碩詩	鈴木華泉	
"	寒山詩	生天目豊州	
"	翰塵化雲煙	大河原一醉	
"	漢詩	平塚碩伸	
"	宿雲門寺閣	小宮唐遷	
"	六言二句	鷲谷青隋	

格調へのねがい

本年は文字性、構成面で多様な様式の兆しが見えて来たことは喜ばしい、だがもっと激しく揺れ動いてほしいと思う。

個性とは自我の発露ではない、そこには大きな落とし穴がある。

格を出すには先ず格に入る、格があるゆえ内容深化への可能性がある。

古人の求めたる処を求めるといふ目的に向って、蠅螂は蠅螂なりの最善の精進をする覚悟は必要であろう。

「懷疑は悟入の発端をつくる」と誰かが言った。

「懷疑は師説を鵜呑にする人の不消化よりも、その人にとって幸福だ」と

夜があるから暁の朗らかさの期待があるように、書作には懷疑があって当然だと思ふ、爽やかに解決のある日を待つまでのあいだ、焦燥苦悩は貴い経験ではなからうか。

15年、20年の書歴の人達が、いわき市美展を或る水準の高さにおいて、充分に書き込みの成果の出品を思わせる、充足した作品の熱気は、審査への酷しさを要求させるものであった。

入賞、入選と言つても誠に肉迫した紙一重の差であつて、兄為り難く弟為り難いと言ふところであろう。

練度を踏まえた各人の自信に満ち満ちた、明るい雰囲気の商品群の展示であることは、大変に楽しくうれしい。

見応えのあることを疑わない。

綿 引 千 斎

第9回 書部門入賞者

	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	菊花寿	春日八虎	
いわき市議会議長賞	車駕肥輕	菅野桂洞	
いわき市教育委員会 教育長賞	陶淵明詩	雅楽川一暉	
(佳 作)			
ダイコクヤブックス賞	良 寛 詩	清水桂心	
"	嘉 寿	菅野空谷	
福島県報徳社賞	杜 甫 詩	生天目豊州	
"	王 漁 洋 詩	関根溪石	
"	思 江 南	吉田江秀	
"	金 槐 和 歌 集	後藤八重子	
"	田 順 郎 歌	荒井東苑	
藤一心堂賞	亨 壽 星	門馬春錦	
"	吳 昌 碩 詩	斎藤小波	
"	五 言 絶 句	矢内 齊	
"	新古今集の歌	助川空翠	
いわき市書道協会賞	白 樂 天 詩	服部聖峰	
"	七 言 句	高野輝正	
"	無 量 壽	渡辺大雅	
いわき市商工会議所 会 頭 賞	七 言 二 句	伊藤鉄槩	
いわき市文化団体 連絡協議会長賞	戴 叔 倫 詩	伊藤抱琴	
いわきライオンズ クラブ賞	五 言 絶 句	芳賀二葉	
株式会社和組 加地和組賞	蒼 穹	吉田海牛	
株式会社すまい賞	七 言 二 句	吉田茅紅	
有限会社トーカー賞	妙 法 蓮 華 徑	蛭田秋月	
いわき市民美術覧会 運営委員会賞	岑 參 詩	橋本春光	
"	鐵	中村静雅	
"	漢 詩	平塚碩伸	
"	秋 菽 帖	松本靖子	
"	李 中 詩	白川一風	

審査にあたって

市美展に「書」の部が加わってはや5年の歳月が流れた。この度の審査に当って強く感じたことは少数の作品をのぞいては力価が平均化してきたと言える。受賞者クラスをAとしてみるとBが断然多くCは少ない。ただAとBの差が判切していて、Bの台頭が全くみられず些かさびしく会場の盛り上りがもう一步というのが実感であった。そこでBクラスの奮起を促す意味を含め(3人の枠内で)新人賞を設けた次第である。

ひるがえって全般に目を通して言えることは当初の頃の騒々しさがなくなり、しっとりと沈潜した趣きの作風になってきたことは今後のために喜ばしい傾向であると言えよう。

これからは古典と自分をどの様なかゝりあいにもって行くのか?作家個人の人間性と古典の対決の場をどの段階で融遇させて進展を図るのか?作家各自の理念が問われることであろう。「書」とはなにか?たえず己に問いつづけて行きたいと切に思うこの頃である。

村上 皓南

第10回

書の部入賞者

	題名	氏名	住所
いわき市長賞	唐詩二首	矢内 齋	
いわき市議会議長賞	卓爾起倫	菅野 桂洞	
いわき市教育委員会賞 教育長賞	陶淵明詩	滝 翠嶺	
(佳作)			
ダイコクヤブックス賞	董其昌詩	田久芳 涯	
"	別蘇州	荒井 東苑	
福島県報徳社賞	画 獸	菅野 空谷	
"	劇 變	松崎 秋香	
"	陸放翁詩	服部 桂山	
"	秋雨夜眠	吉田 汀秀	
"	王維詩	斉藤 小波	
遠藤一心堂賞	子規の句	助川 空翠	
"	魏下蘭座右銘	神林 東伸	
"	五言絶句	伊藤 抱琴	
"	漢詩	生田 小巻	
"	七言絶句	斉藤 王寧	
いわき市書道協会賞	紫紙金字華嚴經	蛭田 秋月	
"	唐寅之詩	渡辺 大雅	
"	良寛自筆歌集	後藤 八重子	
いわき市商工会議所賞 会頭賞	清	吉田 海牛	
いわき市文化団体 連絡協議会長賞	好書堆案	門馬 春錦	
いわきライオンズ クラブ賞	五言二句	鷺谷 青隣	
株式会社加地和組賞	賭	春日 八虎	
株式会社すまい賞	五言句	山 県 一 舛	
有限会社トーカイ賞	疎雨弘炎光	佐川 晩水	
いわき市民美術 展覧会運営委員会賞	杜甫詩	山田 鐵石	
"	暮 蟬	大河原 一 醉	
"	七言二句	柳 沢 小 流	
"	開先瀑布	生天目 豊州	
" 新人賞	蘇軾詩	長谷川 素 碩	
" "	杜 甫 詩	菊 地 閑 山	
" "	五言絶句	河 邊 素 月	

審査にあたって

今回は、本展に書が加わって6年目を迎えた。

審査に当って感じたことは、作品構成に工夫がみられ、又制作の意図をつかんで効果的にまとまった作品が多かったことである。

これは、いわき市書作家のレベルを示すものとして、まことに喜ばしいことだと思う。

今後学書する上に気づいた点を述べれば、大いに臨書に力を入れるべきだということ。

書を学ぶには、何としても臨書によって造形感覚を養うと共に、基本技法としての筆の動きを学びとることだと思う。

現代の臨書は、ただ模倣するというだけでなく、書風から受ける感じ、その造形を構成している原理や原則を見極めることも大切である。また、書としての感覚では、線・質から受ける表情も大切ではないかと思う。

こんな書の表現に、お互い研鑽をつみたいものである。

田久奇峰

第11回 書の部入賞者

題名	氏名	住所
いわき市長賞	遠山 荒井 東苑	
いわき市議会議長賞	陶淵 明詩 滝 翠嶺	
いわき市教育委員会 教育長賞	清寂 養和 菅野 桂洞	
(佳作)		
魁文堂賞	漢 詩 斉藤 小波	
"	中秋 歩月 服部 桂山	
福島県報徳社賞	春思 二首 矢内 齋	
"	写經 大子 刷護 經 蛭田 秋月	
"	曲江 感秋 関根 溪石	
いわき市書道協会賞	吳昌 碩詩 生田 小卷	
"	五言 絶句 斉藤 柳史	
"	詩經 載 驅 渡 辺 大雅	
遠藤一心堂賞	七言 二句 吉田 汀秀	
"	鵲 瑞 春日 八虎	
"	七言 二句 伊藤 鉄槩	
"	岳陽 樓 田久 芳涯	
"	宋司馬 温嶺 率銘 神林 東伸	
いわき商工会議所賞	吳昌 碩詩 草野 秀翠	
いわき市文化団体賞	蘇東 坡詩 長谷川 素碩	
いわき市連絡協議会賞	紫燕 貼風 大河原 一醉	
株式会社加地和組賞	吳昌 碩詩 加藤 峰月	
株式会社すまい賞	夏 草 助川 空翠	
有限会社トーカイ賞	蜀 帝 花 島田 撫邨	
株式会社箱崎美術	唐 詩 小宮 唐選	
株式会社箱崎美術	白 楽 天 詩 山田 鉄石	
いわきライオンズ賞	与謝 野晶子 詩 後藤 八重子	
いわき市市民美術	" 和歌 三首 平島 松琴	
いわき市市民美術	" 白楽 天の詩 四家 浩子	
いわき市市民美術	" 禮 義 菅野 空谷	
いわき市市民美術	" 謝 新 恩 川島 石楠	
いわき市市民美術	" 五言 絶句 今野 秀鶴	
いわき市市民美術	" 五言 二句 柳葉 鶴林	

個性ということ

よく人間つまり個性の表現を求む、という言葉を書く。確かに書に欠かせない要素ではあるが、ここに落とし穴がひそんでいる点に刮目せねばならない。

得意然として筆をくねらせて嫌味たらたらの書法が、個性の発露だと勘違いしている者がある。これには鼻持ならず処方もない。

個性と簡単にいうけれど、これこそ厄介至極なものである。誰でも個々特有の特徴を打出せと注文をつけても無理な話、たやすくさせる筋合でない。

職人芸に徹す、これは僕の座右銘である。かいてかいてかきまわるという反復作業は、原始的で時代錯誤も甚だしいと罵倒されそうだが、この態度がいつに変わらぬ書作の必須であろう。こうなると、個性もへちまもなくなってしまう。

勝手な概念のとらえ方で、自己の書を片端にする必要はあるまい。

佐々木 折 柴

第12回

書の部入賞者

賞 名	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	愛 其 静	菅野 桂 洞	
いわき市議会議長賞	華 清 宮 二 首	矢 内 齋	
いわき市教育委員会 教育長賞	杜 甫 詩	芳 賀 二 葉	
(佳 作)			
魁 文 堂 賞	秋	細 井 研 堂	
"	王 漁 洋 詩	関 根 溪 石	
福島県報徳社賞	漢	齋 藤 小 波	
"	冲	春 日 八 虎	
"	八 言 二 句	渡 辺 大 雅	
いわき市書道協会賞	劉 賀 詩	吉 田 汀 秀	
"	陶 淵 明 詩	滝 翠 嶺	
"	端 座 似 無 為	門 馬 春 錦	
遠藤一心堂賞	杜 甫 詩	長谷川 素 碩	
"	李 白 詩	新 妻 涉 園	
"	沈 林 文 詩	川 嶋 石 楠	
"	五 言 絶 句	小 宮 唐 遷	
"	白 秋 の 詩 二 首	田 久 芳 涯	
いわき商工会議所賞 いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	万葉のうた二首	後 藤 八 重 子	
株式会社加地和組賞	七 言 二 句	島 田 撫 邨	
株式会社すまい賞	正 信 念 仏 偈	蛭 田 秋 月	
有限会社トーカイ賞	七 言 絶 句	齋 藤 柳 史	
株式会社箱崎美術賞 株式会社箱崎美術賞 株式会社箱崎美術賞	子 規 の 句	助 川 空 翠	
いわきライオンズ クラブ美術賞	鴈 南 帰 詩	大 河 原 一 醉	
いわき市民美術 展覧会運営委員会賞	蘭 亭 詩	松 崎 秋 香	
"	杜 甫 詩	服 部 桂 山	
"	五 言 絶 句	鷺 谷 青 隱	
"	七 言 二 句	佐 竹 道 子	
"	五 言 絶 句	伊 藤 抱 琴 子	
"	李 白 の 詩	四 家 浩 子	
" 新人賞	蘭 亭 詩	齋 藤 泰 山	
" "	李 太 白 詩	小 口 天 信	
" "	和 歌 四 首	山 野 辺 未 代	